



1. 俺は、京都人！？

1月の終わり、僕はある50代の女性と、お互いに行きつけの自然食系レストランで会食をした。この時、彼女と僕が食べたのは京都風の白みそ雑煮だった。この店はアットホームなお店で家庭の味。ここに集う人は、大概は顔見知りで、家庭的な味が欲しいからやってくるのだと思う。値段も手ごろだし、自然食だから健康にもいい。もちろん、味も美味しい。

この日、雑煮を食べたのには理由があった。今年の正月、母から電話があった。「あんた、50歳近くにもなって、正月からコンビニグルメなんて物悲しいわよ。こっちに帰ってくれば、雑煮ぐらいは食べさせてあげたのに…。」母は僕の理解者だ。母と暮らす弟も理解してくれている。僕は、母と弟には誰よりも感謝しているけれど、少年時代のトラウマが大きくて、できる限り、故郷には帰りたくない。たまたま故郷の熊本で悲しい少年時代を送ったからと言って、熊本全体に偏見をもつ僕は、合理的に考えれば確かに間違っている。さらに僕は、熊本でひどい目にあったことで、九州全体に偏見をもち、引いては地方全体にも偏見をもっている。でも、わかって欲しい。「偏見」を生きる便（よすが）にするしかない人だって、世の中には存在するのだ。

僕が大学入学で京都に出てから、京都での生活にこだわり続け、よい仕事のチャンスがあっても、地方には行こうとしなかったのは、「地方よりも都会のほうがいいんだ」という根強い偏見のせいだった。もちろん、関西も東京から考えれば地方だ。僕は、元々は東京指向で、受験勉強をしていた時も東京しか考

えていなかった。しかし、不登校で、受験勉強の期間も少なく、大学を慎重に選ぶゆとりもないまま大学を受験するはめになった僕は、博多の西南学院大学を第一志望にして大学進学を考えることになった。九州そのものは嫌いだけど、博多は都会だからまだ許せる。僕はそう考えていた。そして、西南の法学部と文学部を受験することに決めたのが、僕の数奇な運命の始まりである。その時たまたま、法学部の入試の後、1日置いて文学部の入試だった。「この間の一日で、どこか受験できる大学はないものか、一日遊ぶのはもったいない……。」そう思っていたら、その日がたまたま京都の立命館大学の地方試験の日だった。

不登校で高校に行かなかった僕は、修学旅行で京都に来た経験もなく、立命館という大学についても何も知らなかった。しかし、とりあえず、受験しよう。両方受かっても、西南のほうに行くつもりでいた。結果、無事にすべて受かった。しかし、想定していなかった問題が合格発表の日立ち上りだった。西南の方は地元の新報にも合格者の名前が掲載されていたのだが、西南の合格者はほとんど9割以上、九州の高校の出身者だ。当たり前と言えば当たり前。本州から九州の大学に来る人なんてそうそういるもんじゃない。中学時代に一緒だった男の子の名前もあった。ということは、僕の不登校の過去も、いじめられっ子時代も知っている人がいるということ。また僕の名前の後ろには高校名ではなく（大検）と書かれている。おそらく、すぐに僕は偏見の的になるだろう。僕はその点がどうにも心配で、立命館の方に入学することを決めてしまった。

今でも、「なぜ、俺は京都にいるんだ??？」

と不思議に感じることがある。物心つく頃から東京の大学しか考えてなくて、それが博多で妥協することにして、さらに運命の悪戯で京都へ来るなんて……。学風は立命館よりも西南の方が僕と合っていたことは、京都に来てすぐにわかった。あの当時の立命館は、人気落ちた時期で、「クラい」「ダサイ」「アカ」「イモ」「ぶ男・ブス」だとか言われていて、入学してからも後悔することが度々だった。また卒業間際になって、ゼミの先生からアカハラまがいのことまで言われ、憎しみの残るような卒業の仕方になってしまった。

それでも僕は、30年間に渡って、京都に自分の居場所を懸命に求め続けようとした。しかし、現実は厳しい。僕はいまだに京都が自分の居場所だという実感が持てない。そのことを話すと、「東京はしばらく住んでいれば東京人として認めてもらえるけど、京都は、『先の戦争は応仁の乱』だからね」としばしば言われる（笑）。僕が、京都の女性と結婚でもして子供でもできていたら、あるいは、京都の大学の専任教員になれていたなら、僕の京都アイデンティティは確固としたものになっていたのかもしれない。しかし、それはかなわなかった。僕は、少年の頃のトラウマが大き過ぎて、女性と付き合うことにも、京都の大学に専任職を見つけることにも、積極的にすることはできなかったのだった。結婚したり、大きな組織の一員となる自信がなかったのだ。50歳近くになって、トラウマはだいぶ回復はしてきたけども、もう今となっては、結婚も専任も遅いだらう。せつない話。

しかし、京都風お雑煮を食べたことで、一段、ささやかだけど、京都の生活の土台ができたような気がした。母から「雑煮も食べな

い正月なんて」と言われたと話したところ、この店のオーナーの女性から「雑煮くらい、言ってくれば、私が作ってあげるわよ」と言われ、俺ひとりのためにつくってもらうのは気の毒だから、もう一人常連客の女性を誘った。ちなみに店のオーナーの女性は東北出身。一緒に雑煮を食べた女性は、九州の出身である。他の常連客のお客さんたちも、生粋の京都人と言う人は少ない。皆、流れ流れて、このレストランで集うようになったのである。

『キルトに綴る愛』(1995)というアメリカ映画に、「若い人は完璧を求める。でも、若くない私たちは、つぎはぎのなかに美しさを見出すものなのよ」という台詞があって、僕はこの台詞が忘れられない。そう、キルトといえば、布のつぎはぎ。つぎはぎのほうが味わい深いという言い方はできるのだ。つぎはぎの人生を生きてきた、若くはない人たちが、一つの店にたむろするなんて、素敵な風景だ。これこそ、京都らしいと言えるかもしれないのである。京都は文化の町、応仁の乱からの京都人にはなれなくても、京都のアウトサイダーとして生きていく手はある。この日は、オーナーの女性の紹介で、近くのパン屋さんに言って酵母パンも買った。ここも美味しいこだわりのお店。「こだわり」は人間を苦しめるけど、同時に成熟させる。「俺が京都にこだわって生きてきたことも、決して無価値なことじゃないんだ。」そう、思った。

思えば、京都の白みそ雑煮を食べたのは生れて初めてだった。30年間、京都での居場所を見つけようと頑張って、やっと口にしたい一杯の雑煮。ここまでたどり着いた自分を誉めてあげよう。「俺には、京都の雑煮を食べる価値がある!!!」と。

2. 俺はゲイ！？

一緒に雑煮を食べた女性は、フェミニストではないのだが、ジェンダーやセクシュアリティのこともよくご存じだ。

「僕は、変なセクシュアリティなんですよ」と僕は彼女に打ち明けた。

「セクシュアリティは、人それぞれなんだから、変も何もあったものじゃないわよ」と彼女。

「僕は、男の人とゲイ関係になったことはないのだけど、男同士の関係はすごく好きです。子供の頃、友達がいなかったから、今になって、『スタンド・バイ・ミー』みたいな友情に憧れるんです。女性に欲望がないわけじゃないけど、女性と付き合うとなるとカッコつけなきゃいけないから面倒くさいんですよ」と僕。

「カッコなんてつけなきゃいいのよ」と彼女。

「でも、僕は若い頃、女性から『気持ち悪い』と言われ続けて、だから女性が怖いという気持ちは抜けません。女性への偏見と言われるかもしれないけど、僕は男の子から『気持ち悪い』なんて言われたことはないし、僕のことを気持ち悪いと感じるのは、女性独特の生理なんだと思うんです」と僕は訴えた。

「若い女の子は、『可愛い』と『気持ち悪い』くらいしかボキャブラリーがないのよ。確かに、私の頃も、女子に『気持ち悪い』と言われていた男の子はいて、そういうタイプの男子って、女の子とばかり遊んでいたり、他の男の子のなかに入れなくて、浮いているようなタイプだったわね」と彼女は回想してく

れた。

「僕は、まさしく、そういうタイプだったんです。女子の方は深い意味はないにしても、『気持ち悪い』なんて言われるのは、男の自尊心を深く傷つけるんですよ……。僕が女性と付き合うのが怖いのは、女性から心ない言葉を言われた時に、少年時代のトラウマがフラッシュバックしてくるのが怖いんです。僕は強い女も怖いし、弱い女も怖い。強い女に傷つけられるのも怖いけど、弱い女に涙顔ですがって来られるのも怖いんですよ」と僕は話した。「男同士の方が楽だし、男の人の方が僕は好きです。これって、ゲイなんですか。。。。」

『メゾン・ド・ヒミコ』(犬童一心監督・2005)は、自分自身もゲイで、ゲイ男性ばかりの老人ホームで仕事をしている男をオダギリ・ジョーが演じて話題になった。オダギリ・ジョーはゲイに見えるだろうか。ゲイと言えば、普通、映画などでは、おねえ系に描かれるか、あるいは筋肉系に描かれるかのケースが多いが、オダギリはどっちにも属していない。繊細で、芸術的才能がありそうなところはゲイ的と言えるかもしれないが、しかし、とりたててストレートの男性と違った雰囲気があるわけではない。したがって、普通のところで普通に働いていても、違和感はない男に見える。しかし、彼はメゾン・ド・ヒミコという老人ホームで、老人ゲイの世話をしながら生きている。「俺はずっと独りだったからさー。卑弥呼と会うまで」とオダギリがつぶやく場面がでてくる。ここにそこはかかないゲイの悲しみが感じ取れる。

僕は、オダギリと自分を重ね合わせた。僕は不登校で、高校にどうしても行かれず、通

信制の高校に通いつつ、大検の準備をした。通信制の高校は、当時、おじさんやお婆さんばかり。普通の男の子が、クラブやスポーツや受験勉強や遊びに明け暮れている頃、僕はおじさんやお婆さんと勉強することしかなかったのだ。言いようもない孤独。まだ不登校や引きこもりという言葉もなく、誰も理解してはくれない。しかし、通信制の高校だけは行かなくては……わらをもすがるような思いだった。あの時、誰か自分を救ってくれる男性に会っていたら、おそらく、僕はその人に一生の恩義を感じただろう。

オダギリ自身が述懐しているように、岸本春彦(オダギリ)は「老け専」の男ではない。映画は、かつてはゲイバーを経営していた卑弥呼(田中泯)の娘の吉田沙織(柴咲コウ)が、死ぬ間際にいる父のところにやってくるころから始まるのだが、岸本は、沙織の上司である細川(西島秀俊)に性的にはそそられている。岸本と細川の最初の会話の場面。「てっきり吉田の彼氏だと思っていました。吉田にしてはいい男つかまえているなあ」と細川が言う。「僕、女に興味ないんですよ」と岸本は答える。今度は、岸本が細川に「細川さんは、男から迫られたりしたことあるんじゃないですか?」と問いかけ、「学生の時にアメフト部のやつにいきなり羽交い絞めにされそうになったことはありましたね。」と細川が答える。異性愛と同性愛が交錯する世界が垣間見える。細川からすれば、岸本ほどのイケ面だったら女にもてるだろうと考え、岸本の方も、細川ほどのイケ面だったら男に襲われることもあるだろうと考える。同性愛者は同性愛の目線から考え、異性愛者は異性愛の目線で考える。思えば、異性愛・同性愛と分け

てしまうから関係が上手くいかなくなる。たまたま好きになった相手が、同性だったり、異性だったりするというふうに変えてしまった方が万事上手くいくように思えるのだけでも、今の社会では、同性愛は徐々に認められるようになったものの、性的指向はどちらか片方であるという考えは根強いように見える。もっと柔軟に両方を行き来することはできないのだろうか。

不登校だって、俺たちの頃はよほど変わったやつだと見られていた。しかし、今は不登校のやつはいくらでもいるし、いじめや体罰が横行する学校なんて、やめることも一つの選択だと考える子も増えているだろう。俺が不登校だった頃、俺を白眼視した熊本の連中。俺は今でも許せない。時代が流れ、不登校が異常とは見なされなくなった今、彼らは俺に対して「すまない」と思ってくれているだろうか。

3. 俺は、ナリワイ！？

「僕は社会的地位があって、奥さんと子供がいる人が羨ましいなあと思いますよ。だって、そういう人は丸ごと存在を受け入れてもらえるんだもの」と僕は彼女に話した。

「あなただって、受け入れてもらえているでしょう。非常勤の仕事はちゃんとあるわけだし、友達も多いし……。あなた自身が勝手に、『社会的地位や妻子のいる男のほうが幸せだ』という昔の価値観にとらわれているだけなのよ」と彼女。

「数年前に仕事をご一緒した女性がいたんです。で、理想の男性は？という話になって、彼女は、『仕事ができる人』と答えたんです。

僕は一瞬、『結婚しても、私に仕事をつづけさせてくれる人』という意味で言っているのかと思ったんだけど、そうではなくて、『仕事の能力のある男性』という意味で言っていたんです。彼女は僕と同年代で、独身なんだけど、ずっとキャリアを積んできた人だから、彼女が家族を養うくらいの経済力だってあるはずなんです。なのに、やはり男にはそういうものを求めるわけでしょう？ 彼女に、『僕は大きな組織でやっていく自信がないから、非常勤で頑張っていきます』とメールでしたら、『国友さん、充実した仕事のためには、安定した基盤があったほうがいいですよ』と返事してこられたんですよ。なんとなく、傷つきました」と僕。

「それは彼女もあなたと同年代だから、そういう価値観を刷り込まれてしまっているのよ。安定した地位があって、妻子のいる人が必ずしも幸せとは限らないことはわかっているでしょう。隣の芝生は緑なだけよ。」と彼女。

そうなのだ。俺たちはもうアラフィー（50前後）だ。俺たちの世代の価値観はもう古い。それを自戒しなくてはならない。

最近になって、「ナリワイ」という言葉が、僕の周りの若い人の間では流行っている。伊藤洋志さんが『ナリワイをつくる：人生を盗まれない働き方』（東京書籍・2012）という本を書いて、これが話題になっている。伊藤さんは、非バトルタイプの生き方と言うことで、自分のしたいことをやって、それでお金を稼いで、お裾分けのネットワークを紡いで、自力で生きていくことを「ナリワイ」と定義して、提唱している。僕の行きつけのカフェのお兄さんも、伊藤さんの説に賛同していて、カフェをしながら、マッサージをしたり、空

手を教えたり、そういう生き方をしていきたいと話していた。昔だったら、こういうフリーター的な生き方はなんとなくネガティブなイメージがあったのだけど、今となってはポジティブである。「今さら、終身雇用で愛社精神という時代じゃないですから」とそのお兄さんも語っていた。

俺だって、大学の非常勤講師の他に翻訳やテープ起稿のバイト、本の執筆などもしたことがあるので、「ナリワイ」という言い方はできる。そう考えれば、俺は時代の先端を行く生き方を選択してきたナリワイ男ということになる。そうそう自分を悲観することもないのかもしれない。

4. 俺は、ブロマンス！？

僕の交友関係は、女性もいるが、親密なのはほとんど男だ。そのなかには 30 代、40 代の独身男性も多くて、ひょっとするとゲイなのかなあとと思う人もいる。でも、どっちでもいいのだ。そもそも、彼らと会っても、映画や趣味、仕事や社会、食べた料理やパソコン、旅や生き方の話ばかりで、女性の話にはならないし、性的な話にもならない。僕の知らないところで、女性と派手につきあっていたりするのかもしれないけど、そんなのは僕にはどうでもいい。彼らがゲイであろうが、女好きの精力絶倫男であろうが、僕と心のキャッチボールができるのならば、友人だからである。

この頃、便利な言葉ができて、男同士の恋愛的ホモソーシャルをブロマンス (bromance) というのだそう。ブラザー (brother) とロマンス (romance) をくっつけ

た言葉だが、そういえばこれに近い男友達は僕には何人かいる。

前にも書いたボディ・メンテナンスの男性は、時々、僕の部屋でマッサージをしてくれるが、マッサージの場合だと女性はもちろんのこと、この頃は、男性でも変なところを触るとセクハラと言われる可能性はあるので、それなりに気を使うらしい。

この人はオイルマッサージが好きなのだそう。時々、僕にはクリームをオイル代わりにしてマッサージしてくれる。当然、僕は上半身裸の状態、彼がクリームを塗ってくれるのだが、時々、かなりきわどいラインをマッサージすることもある。例えば胸をマッサージする時もあるし、僕は股関節が固いので股間を強い力で押される時もある。傍から見たら、ホモ行為をしているようにも見えるかもしれない。

「こんなことをするのは国友さんだけです。セクハラだと言われたら、悪い評判がたちますからね」と彼は言ってくれる。「ということは、俺が一番、友達だからだよ」と言うと、「そうですよ」と彼。彼の言葉は真実だと思う。よっぽど心を許し会った中でなかったら、2人きりで、こんなマッサージはできない。この人だったら、セクハラの言いがかりはつけないという信頼がない限りは触れないだろう。こういう時に「俺って、ホント幸せだ」と思う。この人は、俺のことを友達だと思ってくれているんだなあとと思うからだ。

岸本は、沙織の父親の男の愛人である。母を苦しめた父の愛した男である彼に、最初は不信感をもつ沙織だけれど、2人の間には次第に友情が芽生えて入って、岸本が沙織に思わずキスをする場面がでてくる。彼のなかで異

性愛が芽生えたのだろうか。その後、天井を黙って見つめている彼の表情からも、彼がまんざら女性が嫌いではないことが示唆されるのである。キスされた方の彼女は、他のゲイのおじいさんに、「女性としたことありますか？」と思わず尋ねてしまう。同性愛の男が女を好きになるのかという疑問がわいてきたのだろう。

この後、彼女をベッドに誘う岸本。2人はベッドに腰掛ける。彼女の肩を抱こうとする岸本。彼女の顔を自分の方に向けてキスをする岸本。2人のキスシーン。彼女のエプロンをほどいていく岸本。もう一度、2人のキスシーン。彼女をベッドへ優しく押し倒していく岸本。キスをしながら、彼女の胸のボタンをはずしていく岸本。彼女の胸に手を入れていく岸本。彼女が靴を脱ぐショット。ロマンチックでセクシャルなムードがどんどん高まっていき、いよいよ岸本が同性愛から異性愛に転換するのかわかると思わせる。しかし、もう一步のところまで「触りたいところ、ないんですよ？」と彼女。場面は海へとスイッチされる。結局、岸本は彼女と一線をこえないままなのである。

この場面は何を意味するのか？ 日本のゲイ研究の第一人者である伏見憲明は、彼自身ゲイだが、名著『プライベート・ゲイ・ライフ』のなかで、彼自身の女性体験を語っていて、女性とのセックスの際、女性の身体に欲情していたわけではなく、自分の男の部分に欲情していたんだと語っている。すなわち、「女性とセックスをしている自分の男性性」への欲情である。しかし、これはゲイと限った事じゃない。ゲイのほうがナルシズムは強いのだろうとは思われるが、異性愛の男性で

あっても、女性とセックスする場合に、自分の男の部分に欲情している部分があることは否めない事実だと思われる。

この後、映画の終盤、今度は細川と沙織のベッドシーンが描かれる。細川はストレートの男性なので、彼女の身体を必死に求めようとはするが、ここで描かれるのはもっぱら沙織のふてくされたような不満げな顔。細川の顔は映されず、「声を上げろよ」と沙織に命令する声だけが印象に残る。2人は性交まで行くのだが、その後、「わたしが泣いているのは、あなたが思っている理由ではありません」とふてくされる沙織の顔がアップでとられ、その背後のほうに上半身裸の細川がぼんやり見える。すなわち、細川は女性とのセックスで、自分が満足すれば相手の気持ちなどはどうでもいいというタイプの男であり、肯定的にはとらえられていないのだ。先の岸本とのラブシーンは、性交にはいたらないにしても、繊細な優しさが漂っていた。これと対比されるのである。

この映画で細川と岸本を演じる西島とオダギリは、2人とも女性にもてるタイプのイケ面だが、あくまでも、この映画ではゲイである岸本の方に軍配が上がる描き方となっている。彼の方が女性に対して優しく、沙織も彼に抱かれている時のほうがはるかに幸せそうに見えるのである。

卑弥呼の死後、荷物をまとめて去っていく沙織に、「細川さんからセックスのことを聞かされた。ちょっとうらやましかったよ。お前がじゃなくて、細川さんが」という岸本の台詞で、オダギリは彼女とセックスすることができたのではないかといことが仄めかされる。伏見によれば、ゲイの人もほとんどは結婚す

るのだそうで、隠れゲイはたくさんいるわけだし、ゲイだから女性とセックスができないわけではない。しかし、この時点で、まだ岸本は自分の殻（こだわり？）をやぶることに躊躇があるのだ。「もう一生、会わないだろうなあ」と岸本はいい、沙織はバスで去っていくのだが、彼女が再び戻ってくるところで、映画はエンドとなる。

再び戻ってきた沙織に、岸本は「チューしていい？」と微笑み、「ダメ」と答える彼女だが、内心はダメだとは思っていない。果たして、この2人はこの後、どうなっていくのか。それは映画では描かれていないが、仮に岸本がゲイのままであるにせよ、女性に目覚めるにせよ、あるいは彼女とセックスをしようがしまいが、そのことは、おそらく問題とはならないに違いない。

5. 規範を欲望するということ

死の床にある卑弥呼を見ながら、「欲望が欲しいんだ。なんでもいいんだよ。強烈なのが欲しいんだ。愛や欲望なんてどうでもいいけど、でも、それが欲しいんだ」と涙を浮かべながら語る岸本の台詞には、熱いものがこみあげてくる。確かに、愛なんてどうでもいい。欲望なんてどうでもいい。そんなものなくたって、人間は生きていける。なのに、社会は、俺たちが愛や欲望にプライオリティをおくように仕向けようとする。しかも、異性愛でなきゃだめだ、一流企業でなきゃだめだ、持家でなきゃだめだ……と社会が作りだした規範にそった愛や欲望を強要しようとする。しかし、その規範は絶対的に永遠に続いていくものではない。30年前には白眼視されていた

不登校が、今となっては珍しいものではなくなったように、一流企業に勤めることが、だんだんと若者への魅力を喪失してきているように、規範はどんどん変わっていき、社会の強要する規範を欲望していても、気がついた時には、その規範は時代遅れなのだ。

そのことがわかっていながら僕は、『社会的なポジションをもち、奥さんと子供がいる』という規範を体現している男性たちを、どこかで羨んでいる。欲望のコードは生れた時から、知らない間に、僕のパソコンにインストールされている強力なスパイウェアのようなものだ。それをアンインストールするのは、難しい作業なのである。

彼女とは2時間くらい話しただろうか。彼女と話しながら、俺は、ナリワイだし、ブロマンスをたっぷり楽しんでいるし、よくいえば時代の先端を行っている。決して不幸な男じゃない。京都にもこういう居場所ができ始めたのだし……と思った。しかし、俺は、「社会的なポジションをもち、奥さんと子供のいる」男性たちを、批判したりはしたくない。むしろ生き方は違っても、仲間になりたいと思う。人間は皆、孤独だ。だからこそ、俺だって京都に居場所を求めた。孤独を紛らわすためには、どこかに居場所が必要となってくる。規範を欲望し、規範に同一化することは、自分を受け入れてもらえるための手段であり、ある意味での居場所づくりである。孤独な人間たちの悲しい作業なのである。だから、僕は、誰も責めたくない。人間は誰だって孤独。孤独を共有すれば、人間は皆ブロマンスである。

最後に僕は、昨年の対人援助学会の大会で受けた質問を彼女に話した。僕は個人研究発

表で、女性から受けたトラウマを語り、被害男性の存在を訴えた。すると、若い男性から、「そういう男性をカウンセリングの場に引っ張ってくるにはどうしたらいいんでしょうか」という質問が来た。彼は、男性相談の窓口を紹介する仕事をしていたことがあるらしいのだが、奥さんに心ならずも暴力をふるってしまう男性だとか、加害者的な男性からの相談はあるけど、被害者的な男性の相談はないらしいのだ……。

「まだまだ男の人は、被害者になるのは抵抗があるからでしょう。国友さんみたいに自分のことをぺらぺら喋れる男はまだ少ないのよ。あなたは幸せだと思うわよ」と彼女は言ってくれた。

そうか！ 俺は、考え方を換えれば幸せなのかもしれない。

「規範を求め過ぎる人は、首つり自殺よ(笑)」と彼女は言った。

でもなあ。でも、やはり俺は寂しいから、規範が欲しいと思うこともあるんだよなあ。そうすれば、少しは孤独が紛れるかもしれないって……。これって、やはり無いものねだりなんだろうけど……。

考えてみれば、孤独って、女よりも男に似合う言葉ですよ。まだまだ、男であることは「痛い！」です。